

しのぶ草



（隔月発行）

発行：宮崎市教育委員会文化財課

宮崎市きよたけ歴史館

所在地：宮崎市清武町加納甲3378-1

TEL 0985-84-0234 FAX 0985-84-2634

<佐代夫人を偲ぶ会 厳かに>

NHKの大河ドラマで「花燃ゆ」がスタートしました。時は幕末の長州、主人公は吉田松陰で有名な松下村塾を見事に切り盛りした松陰の妹、杉文です。吉田松陰も、妹の杉文も性格的には動的な印象です。その対極にあって、一生を通じて学問に専念し、清武の明教堂で、日南飢肥の振徳堂で、そして江戸の三計塾で素晴らしい弟子たちを育て続けたのが、安井息軒であり、それを支え続けたのが佐代夫人です。

1月3日は佐代夫人の命日ですので、例年1月中旬には「佐代夫人を偲ぶ会」が開催されます。今年



安井紀子さまもご一緒に…

の偲ぶ会は1月11日に開催され、息軒廟横の夫人の顕彰碑前で遺徳を偲ぶ献花が行われ、ご子孫にあたる安井紀子様もご臨席されました。

終了後、研修室で朗読劇等もあり、感慨深い会になりました。

偲ぶ会に先立ってNHKから電話があり、吉田松陰とほぼ同時期に活躍した息軒先生、そして佐代夫人について取材をしたいとの連絡があり、収録と放映がなされました。将来的に息軒先生並びに佐代夫人のドラマ化もあり得るかも知れません。

【きよれきアラカルト】



現在の恒久神社

木花地区より平賀快然作と思われる「毘沙門天の木像」の寄託を受けました。快然は清武出身の江戸時代の仏師です。ありがとうございます。

下中野文化財愛護少年団による旧宅清掃

顕彰会や商工会婦人部に続き、親子で旧宅裏を掃除してくださいました。息軒の郷では、伝統が確かに引き継がれます。



<清武郷の隠れた史跡 第3回>

「国富荘ゆかりの神社」

平安時代末から南北朝時代頃まで、全国の土地は、寺社や天皇・有力貴族の私有地である「荘園」と、各国の国衙（現在の県庁）所管の「公領」（国衙領）とで分割されていました（こうした土地制度を、「荘園公領制」とよんでいます）。宮崎平野も、おおむね、宇佐八幡宮（大分県宇佐市の宇佐神宮）領と、近衛家領の島津荘、そして、鳥羽上皇の皇女八条院（暎子内親王）の領有だった国富荘に分割されていました。

このうち、近世清武郷につながる、大淀川河口域南岸の一角は、「国富荘河南」とよばれていました。建久8年（1197）6月に作成された、日向国内の荘園ごとの田地面積・領主の名を記した「日向国図田帳」には、国富荘内の地域区分として、「加江田」「加納」「大田」「国富本郷」「左右恒久」「隈野」「吉田」「源藤」「鏡淵」「今泉」といった、現在の赤江地区・木花地区・清武町内の大字や町名につながる地名が確認できます。



現在の田元神社

現在、国富荘の故地であることは、国富小学校や国富が丘団地といった名前からうかがえるのみですが、その由緒をうかが

わせる神社が現存しています。そのひとつが、国道220号本郷ランプ北側に鎮座する「田元神社」です。本来は、現在の宮崎空港ビル付近にあった神社ですが、昭和16・17年（1941・42）頃、海軍赤江飛行場の建設にともない、現在地に

に移転しました。神社の由緒によると、本社は、寛治4年（1090）5月、都萬神社（西都市妻）の祭神を神託によりこの地に勧請するにあたり、仮殿として建立されたといわれています。

そして、この仮殿から遷された本宮が、赤江地域センター北側に鎮座する「恒久神社」だと伝えられています。本社は、旧名「江南一之宮大明神」。「江南」とは、大淀川の南の意で、「河南」と同義です。社伝によると、平安時代末期、国富荘の開発領主である日向国衙の在庁官人（役人）日下部氏が、都萬神社から勧請してきたといひます。

このふたつの神社の由緒に共通するのは、日向国衙近くの都萬神社から勧請されたという点です。同社の社家は、日向国衙の役人だった日下部氏の一族が代々つとめており、国富荘の開発と同時に都萬神社がその鎮守として勧請されたとすれば、同荘の開発そのものを日下部氏が主導したとも考えられます。近年の研究では、平安末期成立の荘園の多くは、上皇などの皇族が寺院建立の建設費用捻出のため、国衙に働きかけて開発したと考えられています。国富荘もそうした荘園のひとつであり、その名残が現存するふたつの神社の由緒に引き継がれているのでしょう。（文責：新名）



現在の恒久神社



恒久神社の扁額

企画展 「没後百周年記念 川越進と宮崎一分県運動と大宮崎町構想」 3/8(日)まで

開催中



ご来場をお待ち
しております

